図書館と私——パリの国立図書館から国立(くにたち)へ——

市　川　慎　一

(一)

院生時代のフランス留学は，1966年(昭41) 9月から1970年(昭45)の春に及んだので，私の一回目の滞仏は比較的長かったと言えるかもしれない。留学先はディドロ Diderot 研究の第一人者ジャック・プルースト Jacques Proust 教授のいるモンペリエであったが，この南仏の大学都市で日本ではなかなか入手しがたかったディドロ文献を手当り次第読み漁れるという期待は見事に裏切られてしまった。というのも，前年度までモンペリエ大学の全学部は旧市内にあったが，1966年から理学部と文学部が町はずれの新キャンパスに移転することになっていて，それにともない大学図書館も移転を始めていたからだった。新キャンパスの文学部図書館には学生の予習用のテクストが先に到着していただけで，私が参照したかった研究書の類は，依然として旧大学図書館に残されているか，あるいは移転用の荷物の中に紛れているかの，どちらかという有様だった。

このような状態が約一年間続いたので，留学の初年度はモンペリエで落ちついた勉強ができなかった。そこでまとまった研究文献を見ておくべくパリの国立図書館へ南仏から何度か往復をしたが，そのたびにプルースト教授に研究旅行のための証明書 attestation を書いていただいた。

フランス政府が当時宿泊料として一日あたり支払ってくれた手当ては星なしのホテルにやっと素泊りできるぐらいのわずかなものだったので，中心部から遠く離れた安宿とパリのど真中にある国立図書館の間をかようのに少なからぬ不便を感じていた。

いまから思うとこのような物理的事情もあって，その頃地方都市へ留学中の日本人留学生を比較的優遇してくれたパリ大学都市の日本館にも何回か泊めてもらうことになった。そうしたパリ滞在のある時，たまたま相部屋になり，知り合いになったのが経済研究所の津田内匠教授である。津田教授は（と続けていくとだんだん書きにくくなってきそうなので以下津田さんと言わせてい

ただくが），当時，後で世界各国の十八世紀研究者の度胆を抜いた労作『チュルゴーの蔵書目録』の準備のため，国立図書館のどこかで，毎日，日本から持参したカメラで古版本を撮影されていた頃であったかと記憶する。けれども日本館の二人部屋では，津田さんも並々ならぬ関心を持ちつづけておられるディドロをめぐっての議論が中心になり，ジャック・プルーストの学位論文『ディドロと「百科全書」』(1962)の内容やそれまでの日本におけるディドロ研究等を語ってはしばしば深更におよんだこともあった。

ディドロ研究の上で，依然として貴重なエディションの一つである，いわゆるネジョン版『ディドロ全集』が一橋大学に存在することを知ったのも，たしか，そうした津田さんとの議論を通じてであったはずである。

(二)

話はかわるが，今秋，日本学術振興会の招きで来日し，約一カ月間滞日したランス大学のロラン・デスネ Roland Desné 教授がある会合の時にこんなことを言っていたのが私の脳裡からはなれない。「自分はパリの国立図書館以外で十八世紀研究ができうるとは思わない。日本の学者はイギリス人のように自分で本を購入して研究しているのか」と。この問いかけに対し，その場に居合せた仲間の誰も適切に答えなかったと思うが，考えようによってはフランス人が東洋の島国での研究のレベル等について日頃考えている本音がポロリと出たとも考えられる。もっとも私は英国人が日本人と同じように本を買いこんで研究するのかどうか知らないので，デスネ氏の発言の後半についてはなにもコメントできないことは言うまでもない。

イギリス人のことはともかく，デスネ氏は，フランスの研究者の一般的勉強方法に関しては正直に語ってくれたのだと思う。

事実，私が1978年（昭53）から約一年間，再度渡仏し国立図書館に毎日かよった時，受付係の奥の半円形室 hémicycle でいつも調べものをしているデスネ氏によくお会いしたものだ。私が垣間見ることができた限りでの話だが，世界的に著名なフランスやスイスの学者の書斎にも日本の先生方のそれほどに本がなかったことから想像すると，これらの教授も，やはり図書館以外で研究をされることは極めて少ないのではないかと思われた。

考えてみればヨーロッパではこれは当り前のことなのであって，パリの国立図書館ほど完備していない地方都市の市立図書館でも，私の研究対象としている十八世紀文献は豊富に揃っているばかりか，古版本の閲覧も全く自由というのが常識になっているからである。古版本を購入すると宝物と言わんばかりに死蔵してしまう大学の多い，どこかの国とちがうわけである。

もちろん，ヨーロッパのどの図書館でも，貴重本については，特別収蔵書籍 réserveの制度がとられているが，館内ではどんな貴重本といえども読ませてくれるのが原則である。

他方，書物の保存には格別の配慮をしているところが多く，最近のように，コピー機械が氾濫してくると，特に古版本等は簡単にゼロックス・コピーを許可してくれないのが普通になってきている。

(三)

二回目の滞仏中，前回とは異なって国立図書館へは地下鉄の直通一本でかよえるところに居を構えていたこともあって，毎日のように出かけた時期があった。目的は，同図書館所蔵のルイ・モレリの『大歴史辞典』に掲載されている，ある項目を調べることであった。早稲田の図書館にも「モレリ辞典」の十八世紀版（1732—49刊，早大図書館ＡＡ—3304）が存在するが，私の調査は第一に，くだんの項目が同辞典の初版から掲載されているのか，第二に，その項目の各版毎に加筆や増補がなされているのかどうかを実際に見ることに向けられていたからである。

参考までに初版のタイトルを略記すると，Le Grand Dictionnaire Historique ou Le Mélange curieux de l'Histoire Sainte et Profane...par le Sieur L. MORERI P.D.E.T./ A Lyon / Chés

Iean Girin, & Barthelemy Rivière, / rüe Mercure à la Prudence / M. DC. LXXIV / Avec Privilege du Roy [Rés. G.-330] となり，1674年リヨン刊の初版は国立図書館でも先ほどの réserve に指定されている。こうした特別収蔵書籍を閲覧するには，何故その後の版では駄目で，この特別書籍を参照する必要があるのか等々という設問に答えねばならない。けれども受付の係官がこの理由を了解すれば，特別室ですぐに現物をみせてくれる。「モレリ辞典」についても，réserve がつくのは初版だけで，後続の版は一般閲覧室で自由に参照することができた。後の版になるに従って，巻数がふえてくるので，ただでさえ狭い一人分の机一杯にフォリオ版を拡げては項目を探索する日が何日もつづいた。

(四)

私は，いつの頃からか，日本の図書館ではパリに居るような具合に，古い文献を自由に閲覧できることなどは夢のまた夢ぐらいに考え，半ばあきらめていた。

ところが，必要に迫られてネジョン版『ディドロ全集』を見に，社会科学古典資料センターへ行ってみて，私は日本にも欧米流の「開かれた」図書館があることを知り，驚きもし，いまではむしろ羨望さえしているのである。

前から懸案のネジョン版の必要部分はその日のうちにマイクロ化を依頼できたのはもちろんのこと，「バート・フランクリン文庫」ほか計三冊のカタログをいただくという幸運にも恵まれたのである。

カタログを眺めていてディドロの『セネカ論』のめずらしい版本をみつけて驚いたり，晩年のディドロが協力したレナル師の『両インド史』に至っては重要な版がよく揃っているので八王子から品川へ引越したいまの方が皮肉なことに以前よりもかよいにくくなった国立へ行く必要に迫られているわけである。(Le 2 déc. 1981)

(早稲田大学文学部教授)